



愛のごとく(下)

渡辺 淳一

新潮文庫

あい
愛のつと

新潮文庫



昭和六十二年十月二十五日 発行
平成元年十一月十五日 十三刷

著者 渡辺 淳一

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 編集部(〇三)二六六―五一一

振替東京四―八〇八番

価格はカバーに表示しております。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Jun'ichi Watanabe 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-117616-7 C0193

新 潮 文 庫

愛 の ご と く

下 卷

渡 辺 淳 一 著



新 潮 社 版

3929

愛
の
ご
と
く
下
卷

娑^{しゃ}婆^ば

八月中、風野^{かざの}は比較的暇だったのが、九月の半ばから、また忙しくなってきた。

前にまとめた「医療行政を斬^きる」が好評だったことから、新たに「医は算術」というドキュメントシリーズがはじまったからである。それに六月から続いている「この人の横顔」という人物評論と、保険会社の社史に加えて書下ろしの仕事もかかえている。忙しいのは、仕事があるということだから悪くはないが、前回は好評だと、さらに期待されて、それだけ荷が重い。

だが、編集長は、「うまくいけば、これでノンフィクション賞をとれるかもしれませんよ」といつてくれた。単なるおだてかもしれないが、そういわれると悪い気はしない。

「よし、頑張^{がんば}るぞ」

風野は机に向かってつぶやく。俺^{おれ}が賞をとれば、衿子^{えりこ}も見直さだろうし、「ただのもの書

き屋さんで終るの」などとはいわないだろう。それに彼女が若い男に気を惹かれることもなくなるかもしれない。

「若い男に負けないためにも、頑張らなければならぬ」

仕事をするのと若い男とは、直接関係はないのに、ついそんなふうを考えてしまう。

だが、今度の仕事は東京だけでなく、各地の医療の実態も追う必要があるため、地方へ行く機会が多い。

十月の初め、風野は大口脱税した病院の実態を調べるため、大阪へ行った。もちろん週刊誌の仕事なので、旅費も滞在費も、出版社のほうでもってくれる。

大阪に二日泊って三日目の夜羽田に着くと、すぐ衿子に電話をした。

「これから一時間後に着くけど、晩ご飯の用意をしておいてくれないか」

「その近くで、食べてこられないの？」

喜んでくれると思ったが、衿子の返事は意外に素気なかった。

「せっかく帰ってきたのに、一人で食べるんじゃないからね。簡単なものでいいから、つくっておいてくれよ」

「わかったわ」

衿子は気乗りしない様子で答えた。

昨夜、電話をしたときには機嫌がよくて、明日は何時に帰るの、ときいていたのに意外な

変りようである。

なにか会社で嫌なこともあったのか、ともかく風野は奮発して、羽田からタクシーに乗った。

出張で少し金が浮くと、すぐ気が大きくなる。途中、首都高速の幡ヶ谷ランプを降りたところで渋滞したが、小一時間ほどで下北沢に着いた。

「おい」

ドアを開けて旅行鞆をおくと、衿子が奥から顔を覗かせただけで戸口まで出てこない。旅行から帰ってきたというのに、これでは、いささか拍子抜けである。風野はすぐに風呂に入りたかったが、それ以上に空腹だった。

「まず、ビールが欲しいな」

服を脱いで、いきなりパジャマに着がえ、テーブルの前に坐る。衿子は冷蔵庫からビールを持ってきて、グラスと栓抜きだけをおいていく。風野は自分で栓をぬいて一気に飲む。

「ああ、うまい」

今日は朝早くから飛び廻ってよく働いた。取材が順調にいつて、どうやらいいものを書けそうである。そんなときのビールはこたえられないが、衿子の表情の冴えないのが気になる。「そうだ。お土産を買ってきたよ」

風野は鞆から、象嵌のネックレスの入った小箱をとり出してテーブルの上においた。

「氣にいるかどうか、わからないけどね」

衿子はちらと見ただけで、台所に立ったまま魚の焼け具合を見ている。

「来月、また大阪へ行くことになりそうだけど、今度は一緒に行こうか。土、日なら行けるだろう」

衿子は返事をせず、テーブルに鰯あじの開きとご飯と味噌汁みそしるを並べる。ご飯は、空港から電話をしてから炊たいたらしく、湯気が出ている。一応、腹の足しにはなりそうだが、手のこんだ御馳走ごちそうとはいいいかねる。

「開けてみないのか」

風野はビールを飲みながら、テーブルの上においたままになっている箱を指で示した。

「ありがとう」

衿子は礼をいったが、あまり嬉うれしくもなさそうな顔で紐ひもを解く。

「どうだ」

「いいわね……」

うなずくが、いつものように、「嬉しい」と燥はしゃいだり、すぐ首に下げてみようともしない。

「大阪に行くの、どうだ」

「あなた、一人で行ったほうがいいわ」

「なにか、あったのか」

風野が箸^{はし}を持ったままきくと、衿子は首を横に振る。

「だって、おかしいじゃないか。せつかく帰ってきたのに」

「せつかく誤魔化してくれたのにね……」

「それ、どういう意味だ」

やはり留守中なにかあったようだが、風野は衿子に、今日帰るといって、そのとおりに帰ってきている。別に嘘^{うそ}をついたり、誤魔化したわけでもない。

「なんだ、はつきりいえよ」

衿子は立上り、ガス台で湯を沸かしながらいった。

「奥さん、あなたを探してるわよ」

その一言で、衿子の不機嫌な理由がわかってきた。大阪へ出張中に、妻とのあいだでなにかあったようである。

「さつき、奥さんから電話があったわ」

風野は食べかけの茶碗^{ちやわん}をおいて、衿子を振り返った。

「ここにか？」

「もちろんよ」

妻は、風野が衿子と際^つき合っていることも、衿子の部屋が下北沢の近くであることも知っているはずである。二、三年前、衿子から一度、年賀状がきて、しげしげと見ていたことが

あつたし、一度、衿子が、電話をよこしたとき、妻が出て「どこにお住まいですか」ときき、衿子が、「下北沢です」と答えてしまったことがある。

だがそれだけで、電話番号まで知っているととは思わなかった。

住所から電話番号を調べだすという手もあるが、以前の年賀状をいままできちんと保管していたのだろうか。妻は黙っていて、夫の外泊日をカレンダーにつけたりする女だから、それくらいのこととはするかもしれない。

あるいは、妻は風野の手帳を見たのかもしれない。手帳は大体上衣の内ポケットにいらているが、ときどきバッグのなかや書斎の机の上に置き忘れてくることもある。そんなとき、ちよつと見ればすぐわかるはずである。矢嶋衿子と名前ははっきり覚えているのだから、探る気になれば簡単だ。

だが妻は一度、外泊してきた風野に向かつて、「いつ、どこで、なにが起きるかわからないのですから、行先だけははっきりしておいて下さい」といったことがある。そのときは、曖昧にうなずいただけだったが、それで衿子のところは知らないのだと、たかをくくっていた。

とにかく、彼女のところへ妻が堂々と電話をかけてくるとは、かなり大胆である。これに自信を得て、妻がときどき、衿子のところへ、嫌がらせや呼出しの電話をかけてきては大事である。

まさか妻が、そんなことをするわけはないと思っていたが、これでは安心できない。

「本当に、彼女かな」

「どうしてそんなこと、嘘をつけるの。はっきりと奥さんの声で、宅の主人、そちらにお邪魔していないでしょうか、といったのよ」

「それで、返事をしたのか」

「もちろん。そんな人、知らないというわけにはいかないでしょう。なにか、急用らしいわよ」

たしかに、夫の愛人のところにまで電話をかけてくるところをみると、急用に違いない。

「あなた、奥さんには明日帰るといったんでしょう」

風野は、妻には明日帰ることにして、今日ははじめから衿子のところに泊るつもりでいた。それがわかったとなると、大阪のホテルにも電話をしたのかもしれない。

「そんな無理をしてまで、わたしのところにこなくてもいいのに」

「別に、無理をしてきたわけではない」

「とにかく、泥棒猫どろぼうねこのようにいわれるのはご免だわ」

「妻が……」といいかけて、風野は声をのんだ。妻とかワイフという言葉に、衿子は必要以上
に敏感である。自分が呼ばれたと思うている名を呼ぶのは、相手の怒りを招くだけである。

「そうだったのか」

「まだまだ、いろいろなことをいったわ。あなたが奥さんを愛していることや、子供さんがあなたになついていることも」

「俺達^{たち}が愛し合っている？」

「奥さんの誕生日にネックレスを贈ったんでしょ。来年は結婚十五周年記念なので、一緒にヨーロッパ旅行に行くそうね」

く　　と　　の　　愛
たしかに妻にネックレスを贈ったことはあるが、それは二年前である。しかも子供達に、ママの誕生日だからプレゼントをしなさいといわれて、慌^{あわ}ててデパートで買ったものである。外国旅行も、別に行く^と決めたわけではない。先日、実家に帰ったとき、風野の母が、来年は結婚十五年目なのだから、たまに外国にでも連れていってあげなさい、といっただけである。妻はまだ外国へ行ったことはないが、風野は連れていく、とはつきり返事をしたわけでもない。

「それは違う……」

「あなたが優しくて、奥さまはとっても幸せなんですって」

妻はどうしてそんなことをいったのか。約束したわけでもない旅行のことまで吹聴^{ふいちょう}しては、一人でいる衿子を刺戟^{しげき}するばかりではないか。だが考えてみると、妻は初めから衿子に嫌がらせをし、自分が優越感を味わいたいためにいったのかもしれない。それで衿子が腹を立て、

風野と別れるようにでもなれば、万々歳である。

「みんな嘘だ。気にすることはないよ」

「いいえ、気にするわ」

衿子は昂然こうぜんといい放つ。どうやらこれで妻と衿子は公然と敵対関係に入つたようである。これをどう収めるかが、これからの心配のたねだが、さし当りは、電話のことが気になる。なにか出版社から急用でもあつたのか、それとも田舎の母が病気にでもなつたのか、あるいは子供が事故にでもあつたのか。しかしそんな家族の大事なら、妻は衿子と長々と自慢めかした話などしないだろう。やはり仕事のことかとも思うが、さし当り、やり残してきた仕事はないし、急ぐ原稿もないはずである。

「それで、なんといったのだ」

「もちろん、ここにはいません、といったわ。そうしたら、あなたは主人の何人もいる愛人の一人にすぎないのよ、というの。そんないい方である。わたし口惜くやしいから、今晚は多分、こちらに帰ってくると思います、といってやつたわ」

風野は、呆あきれて衿子を見た。なんということをいつてくれたのか。これでは誤魔化しようがない。まさに妻と衿子の全面衝突である。

「あなたは、俺のワイフは大人しい、なんていつてたけど、凄すごいことといったわよ。いまはちよつと浮気うわき心がおきて、夫をあなたにお貸ししているだけですけど、いずれ振られるのに、

「ご苦勞なことです、つていうのよ」

「……………」

「だから、わたしはお返ししたいのですけど、ご主人のほうから寄ってくるのだから仕方がありません、といってやったわ」

「待ってくれよ」

風野は髪をかきあげて、残ったビールを飲み干した。電話でとはいえ、なんとも凄絶せいぜつなやりとりである。ともかく、いま知りたいのは、妻がわざわざここまで電話をかけてよこした理由である。急ぐことなら、放ってはおけない。

風野の目の前に電話機がある。それで家に電話をすれば用件はすぐわかるはずである。だが、これだけ怒っている衿子の前で、妻と話をする、なにをいいだすかわからない。いまでもすでに、興奮で顔がひきつっている。

ここはやはり、外から電話をするより仕方がないが、そうすると、またパジャマから服に着がえなければならぬ。

「ちよつと、行つてこようかな」

食事を半ばに立上ろうとすると、衿子はすかさず、

「どうぞ、お家へ帰かへつて下さい」

「違う、会社へ行つてみるのだ」

そのまま奥の部屋にいつて、パジャマを脱いで再び服を着る。ネクタイをせず、ワイシャツに上衣のまま出かけようとすると、衿子がうしろからいった。

「バッグも、持っていったらどうなの」

「会社にだけ行つて、すぐ帰ってくる」

「電話があつたのは、あなたの家からよ。奥さんが急用だといったのよ」

そんなことは百も承知である。だがいまの場合、興奮している衿子をおいて、家に帰るとはいえない。そのあたりの気持を女は察することができないのか。いや、衿子は知っていて攻めてくるのかもしれない。

「多分、会社からの用事だろう」

独り言のようにいいながら靴をはくと、衿子はさらに追ってきて、

「もう、今夜はまっすぐ、このまま向こうに帰ったほうがいいわ」

「……………」

「奥さまはお料理も上手だし、他所ではまずくて食べられないんでしょう」

「なんだ、それは」

「宅の主人は、いつもわたしの料理が気に入つて、なんでも食べてくれるんですつて」

たしかに、妻は料理はうまい。特別こつたものをつくるわけではないが、海の町で育ったせい、生きのいい魚を見付けてきたり、ちよつとした味付けも気が利いている。